

2019年度



第3回NUFS&NUAS
読書コメント大賞
受賞作品

NUFS&NUAS読書コメント大賞

～読んで書いてつながろう～

大学生活で大切なのは、正解のない問いに自分のことばで答えようとすること。知性や感性に磨きをかけて、少しでも大きな人間になろうと努力すること。新たな本や人との出会いは、まさにそのための一歩です。

2017年度から始まった読書コメント大賞も、2019年度で3回目となりました。ここでは今年度の応募作品112点の中から受賞作品16点を紹介します。同年代が何を読み、どのように感じ、表現したのかがよくわかります。

コメントを読んで新たな本に出合った人もいることでしょう。あなたも、読んで、書いて、つながる、を体験してみてはいかがでしょうか。



『銀河で一番静かな革命』
マヒトウ・ザ・ピーポー 著

私は時々一日をおざなりにする。周りの変化に気づかないふりで感情に蓋して楽をする。それは、たとえ今日をそんな風に振舞っても、ニアリーイコールな明日が来ることを疑わず、安心しきっているから。

ではある日突然世界の終わりを通達されたならば？日常が終わるならば？この本は、私たちが気づいていながらも汲みとれきれていないやさしい日常の刹那に触れさせてくれます。友人の綺麗すぎる寝顔、日々強まる季節の香、自分と同じ名のあの子、ハリボテみたいな胡散臭い月、すれ違いに聞こえるネイティブの発音が心地よい。どうかあなたの生活に、たくさんの色が増えますように。

(ぼてつく)



『パレード』 吉田修一 著

本当の私を知っている人はこの世に誰もいない。それは私ですら本当の私分からないからだ。年齢も性別も職業も違う5人の若者のルームシェアを通して、あなたは、私は何者なのか問いたくなる。5人それぞれの視点から見える一人一人の人物像はまるで別人で、私が見ているあなたは一部にすぎず、嘘なのか真実なのかすら分からない。それはSNSの世界に存在する私達に似ている。今を生きる私達だからこそ、読まなければならない1冊なのかもしれない。

(クラムボン)



『墮落論』 坂口安吾著

現在話題の映画「ジョーカー」。売れないコメディアンが悪のカリスマ、ジョーカーへと変貌していく様を描いた物語。この作品を見ていて、墮落論のことを思い出した。生きていれば、墮落もする。その中で本当の自分を発見する。日本文化、青春、文学、恋愛、夫婦。様々な視点から語る。「墮落による救済」から新しい自分の可能性を見つけよう。

墮ちよ。生きよ。

(オリビエ)



『命のビザを繋いだ男:小辻節三とユダヤ難民』

山田純大著

牧師だった小辻節三は、ある日家を訪ねて来たハンセン病の男を追い返してしまった。自分の行いへの強い後悔から、宗教や信仰、神について問い直すためアメリカへ渡った。このエピソードは常に行動し、学び続ける小辻の生き方をよく表していると思う。「知りたい」という小辻の前向きな姿勢はいつしか「救いたい」という信念に変わり、日本に押し寄せたユダヤ難民にとっての光になった。他者を受け入れるために必要なことは自らの弱さを受け入れることかもしれない。

(Shiho.M)



『コンビニ人間』 村田沙耶香著

この人の作品を読むと毎回気持ち悪いと感じる。なぜだか分からないが心の奥底まで見られているような感覚がするからだ。しかし、この感覚が癖になって中毒者のように何回も作品を読み返してしまう。この本を読んで異常なまでの同調主義は人の個性を削ぐんだと感じた。古来から異物は排除するという本能が人間にはあるから同調主義はその名残ではないだろうか。日本では特に同調主義の傾向が強いと感じる。他人との同調を押しつけられると毎回気持ち悪くなる。吐き気さえする。自分もこの本で排除されていた異常者と一緒なのだろうか。人間が嫌いになりそうだ。

(橋本 武志)



『Uglies』 series Scott Westerfeld著

The Uglies Series is an amazing tale of societal conformity and breaking the mold. This is a world where the government forces 16year olds to get plastic surgery! But there is so much more to the story than just skin deep, and the main character, Tally, fight's the system and discovers the horrifying truth. This story is amazing because it is action-packed and full of drama, with a lot of girl power in between.

(Shanklin Kirby)

奨励賞

『生き心地の良い町:この自殺率の低さには理由(わけ)がある』

岡壇著

年間3万人が自殺する国、日本。とりわけ我々が意識し、着手すべき問題である事は言わずもがなである。この本は数ある自殺調査において、自殺の危険を緩和する「自殺予防因子」とは何かという、人跡未踏の領域に踏み込んだ一冊である。対象として選ばれたのは最も自殺の少ない町、徳島県海部町。著者の4年に渡る緻密な調査と町民が放つ目から鱗の至言は我々の生き方を一変させる。

自殺に関する“真実”が、この快著にある。

(吉野 晃平)

奨励賞

『臆病な詩人、街へ出る。』 文月悠光著

この本は今まで出会った本とは一味違う。まさに全てが共感だった。「自分探し」をしたいけれど、居心地の良い今の生活を手放したくはない。そんな“臆病”な私に、大きく外へ飛び出さずとも、「現実」を見つめ直すことが「自分探し」でも良いのだと語りかけてくれる。無理に大きく見せずとも、ありのままの私でも良いのだと励ましてくれる。読んだ後、“臆病”な私になんだか少しだけ愛しく感じてしまう、そんなエッセーだ。

(はる)

奨励賞

『カラフル』 森絵都著

いじめ、恋愛、家庭環境など人間誰しも何かしらの不安や悩みを抱えながら生きている。時にたくさんの感情が混ざり合っ、自分の本当の色が分からなくなるかもしれない。目の前が真っ黒に塗りつぶされるかもしれない。けれども見方次第で世界も自分も何色にだって塗り変えることができる。様々な色で満ち溢れているこの世界で自分だけの新しい色を作ればいい。

あなたというキャンバスは今何色ですか？

(もか)

奨励賞

『「言葉にできる」は武器になる。』 梅田悟司著

「思っていることを、うまく言葉にできない」そんなふうに思ったこと、一度はあるよね。コミュニケーションに言葉が必要不可欠であることは言うまでもないけれど、言葉の選び方を一歩間違えると人生にも支障をきたす。それに、「なんか分かんないけど、もやもやする」「なんか良い感じがする」何でもかんでも「なんか」でまとめちゃうのってもったいない。心の内で思っている感情(=なんか)を言語化できたとき、相手に気持ちがダイレクトに伝わるし、感情に整理がついて自分自身がわかるようになる。想いを言葉にできる力が良い人生を導いてくれるかもしれないし、ちゃんと言葉にできるってかっこいい。言葉を鍛える方法が、この本の中にあった。

(AT)

奨励賞

『超暇つぶし図鑑』 ARuFa著

暇のつぶし方のレベルが高すぎて、自分の休日の過ごし方の可能性を広げてくれる本です。“カニを極限まで食べやすくすると、リップクリームになる”という内容があるんですが、まさか生活にカニを食い込ませるなんて！と笑いが止まりません。どんなに小さいことでも全力でやると、とても面白くなることが学べる本で、忙しくても読みたくなります。

(おむすび大百科)

奨励賞

『二十歳の原点』 高野悦子著

私はこの本を読んだときただの学生であることをやめた。学生運動が激化していた60年代、生活に、恋愛に、人生に、そして孤独に苦しみつつも強い意志をもって生きた彼女の文章を見ると私に強く訴えるものがあつた。きっと彼女は私に、今を生きる若者たちに「ただの学生」であるなど言っていると思う。社会に疑問をもち、他者との関係の中にある自己と向き合い葛藤する強い意志を求めている。それこそが若者に与えられた最大のブキであるから。

(よべけん)

奨励賞

『82年生まれ、キム・ジョン』 チョ・ナムジュ著

女性差別の敵は男性か？舞台は女性が最も働きにくい国と呼ばれる大韓民国。主人公のキム・ジョン氏が女子から女性へ、妻となり、そして母になるまでに味わう屈辱や恐怖があまりにリアルに綴られるこの本は、女性差別を体験した事が無い、という人にこそ読んで欲しい。女性差別の本当の敵は、それに気づかせない社会と、気づけない自分自身である。

(茶々丸)

奨励賞

『ハッピー ☆アイス クリーム』 加藤千恵著

人は誰も必ず大人になる。その過程のどこかで、この本に出会ってもらいたいと願う。この本は著者が高校生の頃に詠んだ短歌と、それを題材とした小説で作られている。どこにでもいる高校生。この物語の主人公はあなたかもしれないし、私かもしれないし、あの子かもしれない。たった31音で綴られる青春は鮮烈で、まっさらで、そして美しい。子どもから大人へと変わる思春期に添える、「あの頃」を呼び起こす葉のような一冊。

(倫理)

奨励賞

『「読む力」と「地頭力」がいっしょに身につく東大読書』
西岡壺成著

正直に言おう。私は読書感想の類いのものを書くことはとても嫌いだった。ではなぜ、今この読書コメントを書いているのか？それは、「読書というのは、読んで“なるほど!”とインプットするだけではなく、自分の言葉でよく考えて要約するアウトプットができるかどうか大切だ。」ということがこの本から学んだからである。私を180度変えてしまったこの本を皆さんにも読んで頂き、現役東大生が実践する読書法を身につけてほしい。きっと今までの読書が変わるに違いない。

(38)

奨励賞

『私は私のままで生きることにした』 キム・スヒョン著

世の中に勝ち組、負け組のように、人に優劣をつけるような風潮がある。学歴や年収、家系などで人を判断する。そして誰が決めたのか分からないその優劣に従い、何者かになろうとする。しかしこの本は、私は私のままで生きて良いんだ、と思わせてくれた。何もかも中途半端で悩んだり、能力主義に縛られ生きづらさを感じている人にこの本を薦めたい。私のバイブル。

(かすみ草)